

心の力

第一章

天高うして日月懸り、地厚うして山河横はる。日月の精、山河の靈、鍾まりて我が心になり。高き天と、厚き地と、人と對して三となる。人無くして夫れ何の天ぞ、人無くして夫れ何の地ぞ。人の心の靈なるや、以て鬼神を動すべし。人の心の妙なるや、以て天地に參ずべし。燦たる彼の月と日と、遙かに我が心を照す。我が心の凝りて動くや、能く日月を貫くべし。峨々たる山、漫々たる河、常に我が心に通ふ。我が心の遠く翔るや、能く山河を包むべし。ただ六尺の肉身に、限らるる我が心ならず。ただ五十年の生涯に、盡きぬべき我が心ならず。見よ、雲に色あり、花に香あり、聞け、

心の力は、成蹊学園創立者中村春二先生が一九一三（大正二）年、当時成蹊実務学校の教師であつた小林一郎氏に依頼してつくられたものである。

成蹊学園の各校の学生、生徒および教職員は凝念の際、これを唱和し心の糧とした。また、卒業生は多かれ少なかれその影響をうけ、人生の指針とした。校歌にある「心力歌」はこれである。

※文字は成蹊実務学校発行（一九一五（大正四）年）の『心の力』を原典とし、読みは中村春二先生内声録音のものに拠つた。

風に音あり、鳥に聲あり。此の中に生を托したる、我人にこの心あり。至大至剛はこれ心力、至玄至妙はこれ心靈。ただ此の心あるが故に、我人は至上至尊なり。夫れ眼前の小天地は、離合聚散常ならず。我と我が身と此ところとを、此の中にもに限るものは、天なる日月の精を見ず、地なる山河の靈を知らず。其の精と靈とを鍾めたる、我が尊さを我と悟らず。眼にさへぎる影を拂へ、耳に塞がる塵を去れ。その影消え、その塵絶え、心はずみ鏡の如く、湛然として淵の如くば、彼の小天地に限られし、昨日の我を外にして、至上至尊の我あるを知らむ。